

1. 事業細目：セタシジミ増殖技術開発事業費

予算額 10,560千円

2. 研究名：松原試験漁場および周辺のセタシジミの分布

予算区分 国 補

3. 研究期間：昭和63年度～平成4年度

4. 担当者：橋本・井戸本

5. 目的

天然の生産力を利用した育成技術を確立するため、松原漁場に試験区を設け、親貝、D型仔貝、0⁺稚貝を放流し、その成長、生残、分散等の追跡調査を実施した。

6. 方法

1. 昭和63年6月28日にD型仔貝350万個（殻長約0.2mm、3.5万個/m²）、同年11月29日に親貝780kg、同年12月20日に0⁺稚貝30万個（殻長約0.8mm、3,000個/m²）を試験漁場に区域を定めて放流した。
2. 追跡調査は昭和63年度より継続して実施している。本年度は、10月23～24日に潜水により実施した。
3. 調査地点は、試験漁場内15カ所、漁場外14カ所の計29カ所であった。

4. 採集方法は、50cm×50cmのコデラートを調査地点ごとに船上から無作為に投下し、湖底土約10cmの深さまで採集した。

7. 結果の概要

松原試験区における調査結果を図1に示した。

殻長15mmで分割したのは、滋賀県漁業調整規則により、殻長15mm以下のセタシジミは採捕禁止としているので、それに準じた。

試験区内は、殻長15mm以上の貝が区外に比較してかなり生息しており、試験区をポールで仕切ることにより、資源を保護する役割も果たしていることがうかがわれた。

殻長15mm以上は、試験区外の生息密度に特徴的な傾向を示していないが、殻長15mm未満については、鎖線および一点鎖線で囲んだとおり、平成元年度、2年度ともに、特異的な生息分布が見られた。またエリア内にはいないが、試験区外の北西の方向にも、平成元年度、2年度ともに、殻長15mm未満の貝が多く生息していた。よって、この漁場は、南西～北西に分散する傾向があるようにうかがわれた。

図2に、本年度に試験区内で採集されたセタシジミの殻長組成のヒストグラムと、その正規分布分散を示した。

左から、平成2年度群、元年度群、昭和63年度群、62年度群と仮定すると、平成元年度

の資源加入が多いことがうかがえる。

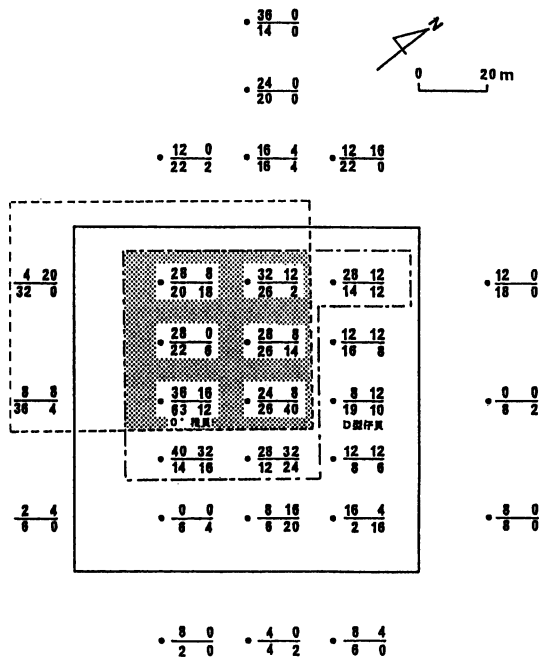
調査時に使用した採集ネットの目合が2mmあり、0⁺の小さな稚貝が捕獲しきれなかった可能性がある。よって、平成2年度の加入群は、このグラフでは正確に反映しておらず、もっと増えると推定される。

いずれにせよセタシジミの生息に好適な漁場では、水域を保護し、それを管理することにより、種場としての役割を果たすことが示唆された。

このような種場になる漁場では、稚仔貝を放流し、資源添加するのはもちろんのこと、健全な親貝を放流するだけでも増殖効果が期待できる。

稚仔貝の生産、飼育、放流にはある程度の技術が必要であるが、親貝放流だけなら漁業者サイドでも容易に行うことができる。将来的には、漁業者自身による自主的な漁場の管理、運用体制の確立が望まれ、またその可能性が示唆された。

8. 主要成果の具体的なデーター



調査日 平成2年10月23~24日 平成元年10月25日
 殻長15mm未満 殻長15mm以上
 個/m² 個/m²

-----H 1年度に殻長15mm未満が
 多く採集されたエリア
 -----H 2年度に殻長15mm未満が
 多く採集されたエリア

試験区内平均 個/m²

21	12
18	13

試験区外平均 個/m²

11	4
15	1

D型仔貝…350万個放流

放流日 s. 63. 6. 28

O+稚貝…30万個放流

放流日 s. 63. 12. 20

図1 松原漁場および周辺のセタシジミの分布

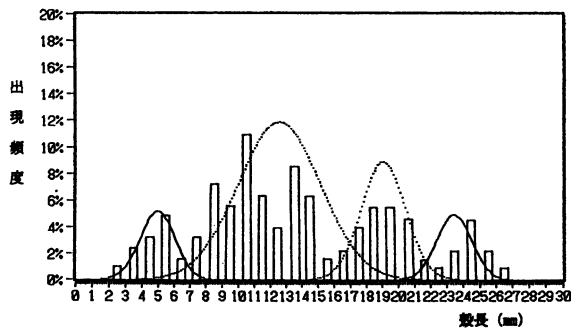


図2 松原試験漁場内で採捕されたセタシジミの殻長組成
 H. 2. 10. 23採捕

9. 今後の問題点

分散、生残等の詳細なデータの蓄積が必要である。また、データの精度を増すために、D型仔貝等への標識方法の検討および現場における食害生物の捕食圧の確認の検討が必要である。

10. 次年度の具体的計画

上記の問題点である、標識方法の検討と食害生物の実態の検討。